

認知症高齢者グループホームにおける家庭らしさに関する研究

A study about the Homelike in the dementia senior citizen group home

A dementia senior citizen Homelike group home

設計・情報 宮腰研究室

G044029 小舘 勇太

G044042 副島 健一

1. 研究の背景と目的

近年、日本では急速な高齢化が進んでいる。それに伴い認知症高齢者の比率も増加している。認知症高齢者における症状の緩和や生活の向上を目指す上で家庭らしさが指向されている¹⁾。

認知症高齢者が以前生活していた場所での物品を持ち込むことにより、家庭らしい雰囲気が作り出せると考えられている。

本研究は、認知症高齢者のグループホームにおいて家庭らしさを、落ち着きを得られる室内の作りと定義し、それを感じさせる要因を明らかにする。

2. 調査施設内の空間構成および物品

グループホームA、Bにおいて、見取り図(図1、図2)に空間のしつらえや物品などの特徴を書き込む方法を用いて施設内の空間構成および物品の調査を行った。

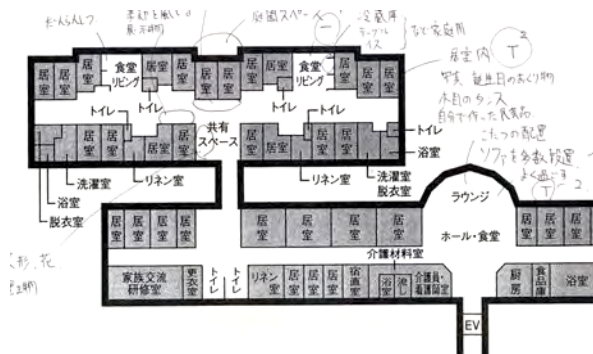


図1 グループホームA見取り図

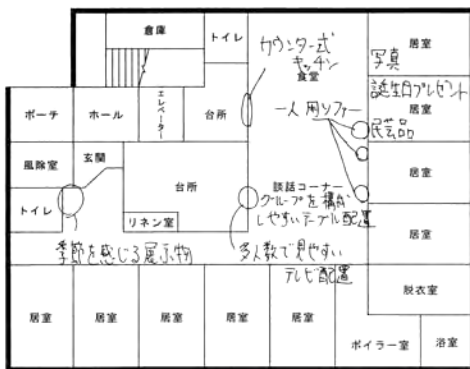


図2 グループホームB見取り図

調査の結果、両グループホームでは、リビングにソファを多数配置し、展示物や工作物を飾っていた。居室内では木製の家具を使用する、施設に入居する前に自宅で使用していた物品を持ち込むなどの行為が見られた。また、台所では家庭用の食器を使用し、一般家庭に近い雰囲気を作り出していた。

木製のタンスや、家庭用の食器を使用することにより入居者が、食器のかたづけや洗濯物をタンスにしまうなどの自発的な行動も見られた。居室内に愛用の物品を持ち込むことで、図3のような居室内を自宅に近いしつらえにしていた。



図3 自宅に近いしつらえの居間

3. インタビュー調査

グループホームA、Bにおいて、軽度の認知症高齢者36人を対象とし、施設内で一番落ち着く場所、一日のうち一番長い時間過ごす場所、部屋の模様替え、入居者が持ち込んだ私物、各室の環境、しつらえとその使いやすさについてインタビューを行った。

インタビューの結果、落ち着きを得られる部屋として食事室、居室、居間の3室があげられた。それぞれの部屋の落ち着きを得られる理由として、表1の結果が出た。ゆっくりくつろげるものがある、にぎやかで活気のある雰囲気で安心感・落ち着きが得られるといった理由が多く見られた。

同様に、一番長い時間過ごす場所も、食事室、居室、居間の3室があげられた。それぞれの一番長い時間過ごす理由として、表2の結果がでた。

ゆっくりくつろげるものがある、にぎやかで活気のある雰囲気や安心感・落ち着きが得られるといった理由が多く見られた。

表1 一番落ち着く部屋の理由 (総人数 36 人複数回答)

室名	理由	人数
食事室	にぎやかで活気のある雰囲気や安心感や落ち着きを得ることができる	4 人
居室	ベッドでゆっくりできる	5 人
	静かで落ち着いて休める	8 人
居間	テレビやソファ等のかつろげる物がある	14 人
	にぎやかで活気のある雰囲気や安心感や落ち着きを得ることができる	10 人

表2 一番長い時間過ごす場所 (総人数36人複数回答)

室名	理由	人数
食事室	にぎやかで活気のある雰囲気や安心感や落ち着きを得ることができる	4 人
居室	人間関係が苦手	5 人
	静かで落ち着いて休める	9 人
居間	テレビやソファ等のかつろげる物がある	14 人
	にぎやかで活気のある雰囲気や安心感や落ち着きを得ることができる	10 人
	散歩感覚で居間に行く	3 人

4. 行動調査結果

入居者の行動を観察し、一日の行動を観察するため、施設の承諾を得て入居者の行動調査を行った。調査方法は、見取り図 (図4) に入居者の行動を 10 毎に一回書き込んでいく方法とした。調査時間は、午後の 1 時から 5 時までとし、調査施設はグループホーム B、対象人数は 9 人である。調査を行う際、スタッフと同様にふるまいながらグループホーム内にて観察を行った。

行動観察の結果、常に 3 人から 4 人の入居者がリビングに滞在していた。入居者は、各自テレビを見る、仲のよい入居者と会話をするなどの行為が見られた。施設内の移動が少なく、リビングにおいて同じ場所に長時間滞在する入居者と、移動が多く、居室とリビングを行き来することが多いが、リビングに滞在する場合は、その他の空いているスペースや、テレビ前のソファで過ごす入居者や、全員がスタッフとの会話を行っていたが、

入居者同士で会話をするのが限られた人達だけという、2つの傾向があった。

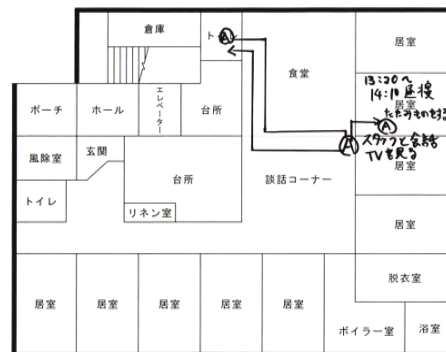


図4 入居者 A の行動観察

5. 調査結果

以上のことから、グループホーム内において、入居者が落ち着きを感じる要因には物理的要因と心理的要因の2つのことがあげられる。特にテレビやソファ・ベッドなど、環境形成する要素となる大型の家具などが落ち着きを感じられる要因としてあげられ、会話によって安心感が得られるとの回答を得た。このことは、行動調査でも同様の傾向が見られ一回の行動の中で自らの生活スタイルを確保しつつも、スタッフや他の入居者との会話に時間を費やす姿が見られた。一方で、一人で過ごす入居者もあり、居室において自らの愛用品を持ち込むなど自らの環境を作り出す様子が見られた。

グループホームにおける家庭らしさは、入居者それぞれが生活スタイルの中で、環境を確保することにより形成される。そのために物理的、心理的要素を適切に構成することが必要である。

6. まとめ

グループホームにおける家庭らしさは、入居者それぞれが生活スタイルの中で、環境を確保することにより形成される。そのために物理的、心理的要素を適切に構成することが必要であることから、家庭らしさを感じる心理的要因は、居場所と生活スタイルの確保が必要であり、それらの中に物理的、心理的要因が含まれていることで形成されるのではないかと考えられる。

参考文献

- 赤間信二郎：認知症高齢者のユニットケア環境における家庭的な雰囲気の構成要因に関する研究 学術講演論文集
- 高田明和「脳を鍛えよう」エール出版